
月は同じ光を放つのに

凧沓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月は同じ光を放つのに

【コード】

N2550D

【作者名】

凧泚

【あらすじ】

「ここは…」学校で起こった謎の事件、あるいは事故…。呼ばれた者は新しい世界で歩き出す。

第1話：この世界に僕はいらぬ

三階にある理科室の窓が誰かに割られた。

先生は正直に言いなさいと声を荒げて、僕ら二年三組の生徒に怒鳴り散らした。

僕は何も知らない。

そもそも興味すら無い問題だった。

窓が割られようと、校内の備品が破壊されようと知ったことじゃない。

それでも嫌いな数学の授業がこういう形であれ潰れてくれるのは、とてもありがたいことだ。

「先生、僕が割りました」

一人の生徒が全てを遮り、声を上げた。

「……」

あれ？おかしいな？

皆が思ったに違いない。あからさまに教室が静まり返り、一人の生徒を見つめる。

先生も先程までの怒りが冷めているようで、えっ？という不思議な顔をしていた。

「先生……？」

生徒もこの異常な空気に不安な様子でオロオロと取り乱しだした。

「お前：名前は？出席番号何番だ？」

先生は謎をぶつけた。

生徒はハツとした顔をして周囲に目を配る。

皆、視線を避けるように下を向いたり、違う方を見ていた。

僕もその一人で、名前を覚えていない罪悪感から視線を机に落としました。

そして生徒は急に教室を出て行った。

ドアが勢いよく閉まる音で顔を上げたが、そこには影も形も無く、

廊下を走る足音が響くばかりだった。

皆、呆然としていた。

本当に誰だか分からない。

彼は誰なのだろうか？

肘を付いて窓の向こうを見る。

昨日も、その前も当たり前のように居た。

実際話たことは無いが、他の人達が話をしているのを見たことがある。

彼は…。

目前に彼の顔が浮かぶ。

それは逆様で異様に顔全体が笑っていた。

窓の外に浮かぶ彼は僕と目を合わせると、口が裂けんとばかりに笑った。

そして消えた。

それが落下していると気付くのに数秒かかった。

ダンツと響くような音がして僕は立上がり窓の外を見た。

そこには彼が血だらけで倒れていた。

「うわああああ」

僕の声を聞いて皆が窓の外を覗きこむ。

彼は不自然に手足を曲げ、絵の具のように赤い液体を全身に纏い、笑っていた。

「死んでる…」

一人の生徒が呟くと皆がパニックになって騒ぎ出した。

他のクラスからも同じような声が聞こえた。

「誰だアイツ!？」

「何で死んだの!？」

「自殺?」

男子生徒の一部は青ざめた表情で彼を見つめ、他の一部は動揺を隠し切れない様子で、俯いて話あったりしている。

女子は皆が部屋の隅に集まり、窓際から離れ訳も分からず泣いて

いた。

先生は血の気の引いた顔をして教卓の下に座り込み、ピクリともしなかった。

皆が皆騒ぎあう中で、僕は一人動けなかった。

俯いてその場にへたり込んだ。

ガヤガヤと騒がしくなる教室、他のクラスの先生、生徒がバタバタと走り回る廊下、そこに授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

皆がビクツと体を強張らせ、チャイムの後に入らるであろう校内放送に耳をかたむけた。

「キーンコーン……」

静まり変える教室内……。

皆が何かを期待している。何か言葉を期待している。

「カーンコーン……」

数名の生徒が小声で話出したのが分かる。

「おい……アイツ……」

僕は声のする方に顔を向ける。

生徒は僕が見たことにビクリしていた。

何がそんなに……。

生徒は不思議そうな顔で口を開いた。

「キーンコーン……」

「お前……お前誰だ？」

皆が僕を見ているのが分かった。

「何言ってるんだ……？」

「カーンコーン」

僕の声はチャイムにかき消された。

うまく声が出ない、枯れた喉は膜がへばり付いたように、飲み込むのも痛いくらいだ。

「何言ってるんだよ」

僕の口から出た言葉。

絞り出した声が、この声が最期の声。

皆の視線が突き刺さる。不安、恐怖心、負の感情が視線に乗せて僕に染み渡る。

次の瞬間には走り出した。

前倒れになりながら立ち上がり、荒れた机の間を縫って廊下に飛び出した。

人にぶつかりそうになり、よるめいて壁にぶつかる。痛みは無かった。

体が透ける感じがした。

学校の廊下を全力疾走しているのに、息は切れること無く、廊下の先に見えるものを何故か延々と目指した。

もう少して分かる。

もう少し…あと少し、もう手が届く距離…。

ふわっと風を感じる。

ガシャツと金属を足で蹴り出した。

全身で風を浴びる。僕の目に映るのは金網と青い空。そこから目を焦がす太陽がちらつく、そのまま僕は足掻くことも出来ずに落ちて行く。

汚い校舎すれすれを落ちて行く。

途中、一人の女の子と目が合った。口が裂けないばかりに笑ってやった。

第2話：この乾いた砂漠の地で

そして僕は地面に辿り着いた。

頭から行った。

頭蓋骨が砕ける音がした。

それは一瞬で次には聞こえなくなった。

鼓膜が破れたからだ。

全身の皮膚が垂れ下がり、僕の目や鼻を塞いだ。眼球が少し飛でて、皮膚の直ぐしたに丸々とした眼球が覗いていた。

耳からは血が噴き出し、血でべちゃべちゃに濡れた頭は潰れた西瓜のようだ。

僕は僕の隣りで僕の姿をまじまじと観察した。

…行かなきゃ。

彼はこの世界にいらなかっただけのこと、僕もこの世界にいらなかっただけのこと…、そして彼女も…。

見上げた空から人影が飛んでいるのが見える。

彼女は振り乱した髪と頭を地面に叩き付けた。

「夏なのに西瓜は無理かな…」

僕は歩きだした。

新しい世界へ…。

頬に冷たいものを感じる。

夢？寝てたのか…、頬に感じたのはよだれだった。

それにしても酷い夢だ。

よだれを拭いながら顔を上げると、もう何が何だか分からなかった。

よだれの付いた机、固い椅子、サブバック、ノートに教科書、い

つもと同じ制服、何が違う？

世界が違う。

今いる場所が違う。

僕は見渡す限り砂の世界で居眠りをしていたようだ。

「ここは…？」

僕はこの世界に必要なのだろうか？

「どこ…？」

こんな世界に…。

椅子に座り世界を見渡す。

砂、砂、砂だらけの世界、僕はこんな世界を望んだのだろうか？

僕が死んだのは夢？じゃなかったのか…？

ってことは、ここは死後の世界？

一体僕はどうしたら良いのだろうか？

地平線まで砂漠が続き、地平線で砂漠と空に別れ、その先も砂漠

なのだろうか？

机に顔を乗せ、地平線を眺める。

熱のせいでかなり揺らいで見える。

とにかく移動しよう。

このままでは干からびてしまう。

机と椅子に別れを告げて歩き出した。

余り考えたくないのだが、最低限の最悪について考えながら歩いた。

ここが死後の世界では無いことは何となく分かる。心臓は動いているし、三途の川も無い、なにより自分はまだ生きている感覚に溢れている。

だとしたらここはどこなのか？それが問題だ。ここがせめて地球であることを祈りたいが、きつと違うのだろうか。

空の色も空気も風も砂の感触も全て同じだけど、違っただろうな。立ち止まり砂を指に通す。さらりと擦り抜けて乾いた粒が砂に混

じって消えた。

歩かなきゃ、そうじゃないと干からびて死んでしまう。

このままだと何も知らずに何も出来ずに死んでしまう…、向こうの世界に居たときのように。

太陽が容赦なく照り付ける暑さの中、直射日光による熱と疲労による体力の消耗で、かなり参っていた。

砂漠にしては暑さもそれほど感じないのが不思議で、空気は乾いているものの、風が吹けば涼しいし、本当にここは砂漠なのかと疑問が頭を過ぎる。

一息ついて、本当にこっちの方角であっていたのだろうか？と真剣に考える。

振り返ると机と椅子の姿は無く、随分と遠くに来たのが分かる。

躊躇いを持って歩いても前に進めないぞ、と自分に喝を入れるが、歩いても歩いても先の景色が変わらない環境に、不安と戸惑いは付きまとい、だんだんと疲労も溜まっていく。

第3話…この足は止められない

僕はここで死ぬのだろうか？

止まることなく進み続けた砂の上、足が上がりなくなってきた。
る。

サクサク歩いていたはずなのに…、こんなに汗まみれになるほど歩いたのは久しぶりだ。

引きずるように歩き通し、全身から噴き出した汗は止まらない。

着ていたブレザーを脱ぎ、首もとのボタンも外した。

靴の中に溜まった砂が痛みが変わるほど圧迫している。

でも止まらない。

止まったら二度と歩けない。

それぐらい分かる…、まだ生きているから。

今は歩くことしか出来ないけれど…。

同時刻 -

荒々しい風で、木々が揺れるのを感じて僕は目を覚ました。

顔を拭うことも許されない。

足元の杖を拾い耳を澄ませる。

誰かいる。

目を閉じるとハッキリ感じとれる“何か”の存在。

風の中に身を潜め、木々の影から僕を狙っている。

溢れ出る殺意が近くに迫っているのがわかった。
生きないと。

「些細な煙が立ち込める、全て覆い全てを隠す力」
呟くように唱える。

杖から白煙が噴き出す。

それでも特異中級魔術師、どこの誰か知らない奴に殺されるなんてごめんだね。

あっという間に辺りは白い煙に覆われた。

濃い霧が辺りに発生したのと同じこと、視界はぼやけて何も見えない。

ただただ白いだけ。

攻撃系の魔法はあまり覚えていない。

いつもはパーティーを組んで、後ろから回復補助をしたりしていた。

まあ今はそんなこと言っても仕方ないか。

吐き出した息、杖を強く握る。

生きなきゃ…。

とにかく逃げないと。

真っ白な煙の中、僕は走り出した。

見たこともないような植物の横を走り抜け、長い杖を振り、どこに向かって走っているのかもわからない。

でも僕は走り続けた。

「ふう」

どれくらい走っただろうか？

自分が使った魔法の効果が切れ始めているのか？それとも魔法の範囲から抜けようとしているのか？

煙は薄く視界が霞む程度の弱いものになっていた。

まだ森の中には変わりはないが、そろそろ戦う準備をしないと。

体に合わないマントを解き、鞆を取り出す。

中身は道中に買った物ばかりだ。

ナイフ、救急セット、三枚のお札（昔話のアレとは違います）、
上級者用魔術書。

その中の師匠に貰った上級者用魔術書を開く。

「確か…、ここらへん」

ペラペラとページをめくり、師匠から教わった攻撃魔法を探す。

「お前は、本当に甘い」

突然頭の上に降り注ぐ言葉。

見上げると師匠は煙草に火を付けようとしていた。

「何が甘いんですか？」

「攻撃をしないことだ」

ボツと指先から出た火が煙草を焦がした。

分かつてはいた。

けれど、一度もそれを指摘されたことが無かったから、それでいいもんだと勝手に思い込んでいた。

それに僕は、守りのプロになりたい。皆の後ろで補助に周り、皆が少しでも血を流さないように頑張りたかった。

「僕は守りのプロになりたいんです」

吐いた煙を僕に浴びせる。

ゴホツと咳き込むと、師匠はニヤリと笑った。

「煙草の煙も防げないくせに…無理だな」

カチンとくる言葉。

師匠は挑発がうまい。

「魔法なら防げますよ」

師匠はまたニヤリと笑った。

しまった。師匠が望んだ答えを出したみたいだ。

「じゃあこの魔法防いでみるよ」

そして師匠は詠唱を始めた。

第4話：この手の痛み

「水の精霊リストよ」

リスト？水の精霊の中でも力が強く、上級者にしか扱えない精霊の力を借りる魔法。

とにかく魔法を防がないと、中級者用呪文書を開く。

その間も師匠は続けた。

「栗の如く、波の如く生きる水の」

早！！

師匠の詠唱はまるで歌を歌うようにスムーズに、しかも間違うことなくハツキリ唱えていた。

急がないと…。

靴の中から三枚のお札を取り出し地面に貼付ける。

自分を中心に三角を作り、魔力を注ぐ。すると薄い防護壁が発生する。

そして、水の魔法に対する保護魔法をかける。そこから魔法を反射させる魔法を唱える。

「この水の音、この水の冷たさ、この水の叫び、水の精霊リストの怒り今此処に解き放つとき」

三十秒ほど唱えていた魔法が一気に解放された。

来る！！

痛いぐらいの大きな音が耳を押し。

立てないほどの大きな圧力が空から一筋の水柱として僕に降り注いだ。

耐えられないのはすぐにわかった。

反射したのかもわからないほどの大量の水が視界を遮り、数秒で防護壁にひびが入った。

対策を考えようと魔術書を開いた瞬間。

僕が意識を取り戻したのは、二時間後のことだった。
師匠の魔法をまともに浴び、鼓膜が破れ、腕の骨が折れ、全身には今も鈍い痛みが残っていた。
僕は改めて魔法の恐ろしさを体験した。

「あつた、これだ」

載っていたのは、あの時師匠が使った魔法。

「水の精霊リストの怒り」

この魔法は狙いを定めなくとも一定の範囲内にいる相手全てに水の裁きが下る。

そう載っていた。

「怖いよ」

何この魔法？危なすぎるよ。だから攻撃系は嫌いなんだ。

でも今は文句は言えない。命を狙われているのだから。敵が何人居て、どんな奴らかもわからない。

ここらで一番大きい木に背を預ける。

三枚のお札を取り出す。

あの時と同じ防護壁を作る。

そして今から長い長い詠唱に入る。

敵が来るまでに終わらせないと、防護壁が壊れたらおしまいだ。
深く息を吸い込む。

鳥の鳴き声すら聞こえないほど自分に集中する。

杖を持つ手、自分が唱える言葉、全てに集中する。

こんな名前もわからない森で、見たこともない植物に囲まれて、知らない敵に襲われて、使ったことも無い魔法で生きる。

きつと無理じゃない、僕ならやれる。

「水の精霊リストよ、私の声に耳を、この声が届くなら、私の手に力を、私の祈りに憂いを、その尊い力の断片を我に」

- 雫の如く、波の如く生きる水の強さをこれに、この水の音、この水の冷たさ…」

魔力を貯めている杖の様子がおかしい。

杖は薄い光を燈ち、重さを増している。ずしりと重さを感じる一方で、杖の違和感に気付いた。杖は重さを失ったり、取り戻したりを繰り返した揚げ句、ガタガタと小刻みに震えだした。

魔力が杖に上手く馴染んでいないみたいだ。

「うわっ」

震えが一層強くなり、手で支えるのも難しくなってきた。杖に抱き着く。

体全体で体重を掛けても、杖は勢いを増すばかりだった。

「うわわっ」

ピキッと音が響いた。

杖にひびが入ったのだ。

やばい。

後は簡単。見たこともない早さで杖は砕けちった。

カラカラの乾いた感触。

杖は地面に散らばった。

キーンツと尖った音が響いた。

目前にはナイフが地面に刺さっていた。

状況が飲み込めない。

ナイフを拾おうとして手を防護壁から出すと、手の甲に冷たい物が突き抜けた。

防護壁に高い音を響かせて何かが当たった。

少し離れたところにナイフが刺さったのが見えた。

手の甲に目を戻すと、それはナイフだった。

「うわあああああ」

戦場での痛みだった。

第5話：この魔法使い

淡々と流れていた時間が、逃げているときと同じ辛く苦しい時間
に変わった。

僕の目前にナイフはまだまだ降り注いでいた。

防護壁に弾かれたナイフが僕の指に刺さり、爪を砕いた。

「痛っ」

杖が壊れ放心状態だったときに降り注いだナイフの雨。

痛みが全身に巡り、手は熱く、血が止まることなく溢れ出ている。
落ち着け。防護壁は、まだ大丈夫だ。まだまだナイフを弾いてい
る。

いつの間にか手を狙っていたナイフの雨が僕自身を狙い始めてい
た。

ナイフが飛んでくる方向を見る。

木の上に居るのだろうか？葉に隠れて姿が見えない。相手は一人
らしい。

ナイフが刺さっている角度からもそれが伺えた。

ナイフが刺さる手に目をやる。ひどい状態だ。

手の甲に一本、中指の爪の生え際に一本刺さっていた。

動かすと血が溢れ、痛みが体を巡った。

「癒しの光よ…」

ナイフが刺さった右手に左手をかざす。

傷は無くならないが痛みと出血は軽減できた。

それでも時間が経てば痛みは戻り、出血はひどくなるだろう。

ナイフを抜きたいけれど、相手は出した左手にも容赦しないだろ
う。

今はとにかく少しでも抵抗しないと。

攻撃魔法は覚えていない訳じゃないんだ！！

「風よ…私の声が届くならその力を示せ」

風の渦が敵を襲う。

足元に発生した風の渦が敵と周りを切り裂いた。

木の枝や葉に傷を付け、強い風を発生させた。

これで倒せるはずはない。

相手は地面に飛び降りた。木の葉の舞い散る中で相手の顔が微かに覗く。

少なからずダメージはあったようだ。

覗く衣服から血らしきものが滲むのが分かる。

はらはらと散る木の葉が終わりを告げると、はっきりと顔が覗ける。

…子供!?

「魔法使いが僕の村に何のようだ」

相手は男の子だった。

それより村って? どういうこと? 僕が行きたい街は森の中には無いはず。

それとも気付かない間に、村に入ってしまったのだろうか?

「村って? 何のこと?」

冷たい視線を飛ばしながら少年は言った。

「惚けるな魔法使いが!! 人の村に無断で入りやがって!!」

キーンと目前で火花が散る。素早い動作で少年はナイフを投げた。きた。

「魔法使いは、いつも嘘つきだ!!」

「僕は嘘をついていない」

まだまだ冷たい目で睨んでいる少年。

「仲間はとうした? 二人で村に入って来ただろう?」

仲間? 誰のことを言っているんだろう?

「僕は一人だよ?」

「嘘を付くな!!」

「嘘じゃない、それが本当なら君はもう死んでる」

それに仲間が居るなら僕はこんなに傷ついていない。

少年は何かを考えていた。悪い子には見えない。きつと何か理由があるのだろう。話せば分かってくれるはず。

「これが証拠だよ」

身構える少年を前に、防護壁を解いた。

薄い壁が消えていく。

札は音も無く燃え、姿を無くした。

「ナイフ抜いていいかな？」

良いよ、とは言わなかった。小さく頷くだけだった。

刺さったナイフに手をやる。抜いて溢れる血に僕は吐き気がした。始めての戦いを思いだす。

「師匠と一緒に出た戦い。」

仲間がたくさん居て、盗賊団を壊滅させる仕事だった。

騎士や弓兵、魔法使いもたくさん居た。

盗賊達は手強かった。

地形を利用し、落石や罠を用意していた。

仲間がたくさん死んだ。

坂になっていた道から血が流れてきた。僕の靴やローブを赤く染めた。

僕は必死で戦った。

師匠は前線に進み、僕は後ろで援護し続けた。

「大丈夫か？」

我に返る。すごい汗だ。

「大丈夫だよ」

さつきまで敵だった少年に心配される。

ナイフを抜いた手は痛々しかった。地面から手を持ち上げたときに、血から粘っこい糸が引くのが見えた。

「癒しの光よ……」

再度回復を試みる。

血の後は残るものの、傷口と痛みは完璧に消えた。

「すごいな、完璧な回復魔法だ」

少年は驚いた顔で言った。

「俺の名前は、ナグサ。あんたの名前は？」

「僕の名前はコーリッシュ」

さっきはごめん。

口には出さないけれど目がそう言っていた。

やっぱり悪い子じゃないみたいだ。

「それより村と魔法使いのことを教えて」

手に持っていたナイフを片付け。

口を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2550d/>

月は同じ光を放つのに

2011年10月4日06時04分発行